

千山萬水 : 雑録

著者	溪川生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	59
ページ	16-33
発行年	1897-10-10
その他の言語のタイトル	千山万水 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4895

像を自由にし、詩をして絶對美觀をなすべきものあればなり。

われは信ず。如何に詩形を變ずるも、内容に於て異なる所なくんば、新躰詩とは名のみにして、今様長歌の舊套を脱する能はざるべきを。あるが故に、現今草創の際に於ける新体詩を研究し、之が發達を助けんもの、われは到底舊思想の詩人に期すべからざるを知る。希くは、西洋の文學に思を潜ひる明治の青年詩人よ、和歌を捨て、漢詩を捨て、此廣漠たる新躰詩の野に入り、荒蕪を拓きて、將來の吾文壇に貢獻する所あれ。明治の新躰詩界に立ちて、最後の勝利を博せんもの、われは哲學の研鑽せる觀念を巧に吾詩に入れ、之を清新の聲調に托する人、更に他の言を用ふれば、西詩を吾國情に調和するものなるべしと信ず。

上述の論、匆々記し去りて、疎笨の譏を免れず。されど、これによりて讀者の新躰詩に對する注意を少くなりと惹き起すことを得ば、わが望は足る。

雜 錄

千 山 萬 水

七月一日、熊本を出で、四日、鹿兒嶋に抵り、海を渡りて六十二海里、南のかた種子嶋に上り、止まること十日、還りて櫻嶋に遊び、遂に隔日に入る、日程實に三十日。千山萬水悉く眼底に入れど、筆を執らんとすれば、困却難澁、贈吟の山越よりも難し。文章の萎靡は、蒸暑の爲にはあらざるなり。憐察をあふぐ。

八月一日星下孤燈の下にて

溪川生しるす。

薩摩湯波間の月の影をだに、

うたになしてそ、家つきにせん。

月明くして郭公を聞くとき、郵書來る、見れば、我友月江子なり。中に、

けふといひて今日も暮れけり夕月夜いつまで君を待つにかあらん。

とあり。げに、今日といひ、あすといひひて、待てる人もあるを、今我は三百里程を踏んで、深く薩山に入らんとす。その嬉しき心、涙も出でぬべう覺ゆれど、かの山嵐、海月を、せめても、と思へば、其かけの朝、汽車にて八代に出で、途中より、只、波間の月の、と言ひ送れり。

鳩山時といふにて、晝食す、唐芋焼酎あり。頼子が『野店迎人勸釀酒』といへるも、かやうの所なめり。晚來、佐敷太郎の山頂に至る、赤坂太郎山は、已に鞋裏の下にありて、小津奈木太郎山は、未だ白雲の外にあり、浮鼈の如き天草の嶋山は、夕日を青一髪の邊に落きて、こがね色に返照を被れり。思ふに、去年の行軍には、學友と共に、普く此嶋を巡り、古壯士の蹟を尋ねて、有馬の古城を吊ひたりき、而して今は此山頂に來りて、遙に其老が岳を望む、感慨又淋漓ときて暮色よりも深ま。

佐敷村におりて、宿を甲斐寛次郎氏に借る。此日、其甥龜井龍水氏と行を共にすべかりしを、おのれ時を違へて、氏は已に在り。坐上れば、杯もまた廻はり、早く醉郷の人となり畢んぬ。

二日。湯浦を過ぎて、津奈木太郎山を越ゆ。羊腸たる山路、風長くして、松樹層巒を蔽ふ。中腹に碧泉あり。

岩か根の清水むすふも涼まきを松のつゆふく峰のあざかせ。

來しあどは松風高きみねにしてくもなる山をなほたどるなり。

世の中の夏の暑さをよそにする松風いかに涼きからまし。

辞句は固より修まらずといへども、第二の歌は、平生の所願、景によりて聊我志をいへるなり。

水俣川を渡りて、水俣町に入り、尾上病院に、舊友岩田氏を訪ひ、始めて年來の離恨を癒し、醉裏、例のを、ものす。

相逢ひて舊きころを語り居れば軒はにかゝるにひつきの影。

かの『葦北の野坂の浦のうつせ貝、妹背となへて、いく世経ぬらん』といへる古歌の野坂の浦とは、この近海岸をいふにて、うつせ貝といふも今あり、化石したるものなりといふ、いかにや。

徳富蘇峰氏は、この地の出身にして、氏が生家は、川を隔て、長松の間にあり。

三日。水俣を離れて、月の浦といふがあり。昔天正の初、深水入道といふが、水俣の城に籠りけるを、嶋津勢は、こゝに陣取して、矢文もて、『秋風にみなまた落つる木の葉かな』と侮りければ、入道に、『寄せては沈む月の浦波』と返され、戦にも打負けたりといふ。名も所も、いとく風雅なるどころなりや。

米の津にいたりて、馬車を僦ひ、川内に着く。この間十三里、阿久根の亭驛を出づれば、所謂『鵲影低迷大濤間』にして、遙に白虹の如き、薩南の吹上濱を隔て、野間の岬を望む、實に『薩山盡處望南洋』にして、詩景頗快濶。是を過ぐれば、只馬車は、山郭水村を縫うて、時に農務の人を野逕の邊に見るのみ。川内に達すれば、友人もまた在り、併せて廿九人、笑話快語、夜に入りて、共に學友東野氏を訪ふ。豚を煮て、例の唐芋燒酎を飲み(温めて)、例の『薩摩何箇』は、瀟座に廣がりて、佳興極りなし、おのれ

は、今夜始めて此技の門弟子となり、梅、六ツ、お二人などの詞を覺えたり。

こゝより半里許り西、東水引村に可愛山陵あり、彦火々出見尊をいつき祭りて、新田神社といふ。このあたり郭公多し。

四日。朝まだきに起き出で、新田神社に詣づ。露いと深く、狹霧小暗きまで立ちこめたり、朝日のやうやう昇るに、空さうげなく晴れ渡りて、川内川の川景色、麗はしなどいふばかりなし。

きのふ、なまじひに乗りも馴れぬ馬車に乗りて（一里、一錢五厘、二錢ばかりなれば、その安さに迷ひて）いたく目暈みを催したれば、荷物は悉く友人の馬車に預けて出で立ち、獨り翠山の人となりて、疲るれば息ひ、息へば酒幔を擡げて入る、至るところに醉郷あれば、未だ羈遊の心を知らず。この邊は、即薩摩山にして、金礦夥多き、溪澗至るところに水車を設けて、淘汰の古式によるも多かり。

市來といふところにて晝食を、午後六時、鹿城にいたる。川内にて別るよとき、檜林氏と共に、海岸通りの旅館に宿るべき約ありたれば、行くに、糸山氏もまた在り。三人悉く酒腸あるものなれば、献酬の杯飛ぶが如し。酒中、檜林のいふに、君の山河を訪ふ、快は快なるべしと雖、吾等は今夜、南のかた種子嶋に行かんとするなり、孤島の亂濤は、一段の趣味あらん、君心なきや。おのれ、頗る動く、されど、風流も程こそあれ、しかも、コンパスの糸山の連れ立ちたる、いよく訝しければ、切りに杯を引いて答えにためらひけるを、訝からるゝも理なり、實はかくくと、氏が農學を修むるは、聊他日を此南嶋の平原に望むものあればなり、已に先年其南端の地を購ひて、移住民をも入れたれば、今度糸山に頼みて、共に其測量を試みんとするなり、と一伍一什を語らふに、始めて事の由も分かりたれど、さりとて、おのれには、日取りの都合もあり、又かねて手塚氏との約もあれば、せめて二三日の後なら

ば、といへど、今夜十時の出船なりといふに、如何がはせんか、と小首を捻ねるうちに、他の話も出で、酒も亦来て、遂に醉襟我を忘れんとするとき、俄に汽笛の鳴るに驚き、階を下りて波止場に出づれば、月黒くして潮高く、江村の漁火濕りを帯んで、雲方に重玄。

五日。夢は亂漣の潮に驚きたり、仰げば、一帯の岡陵青きこと藍の如く、點々たる人家は、海を窺ふに似たり。こゝは、是種子嶋の港、西之表、いにしへの赤尾木なり。おもへば、おのれは、舟に乗りたるなり、開闢山下を夢に過りて、遠く六十二海里の洋中に来りしなり、からのふる事など、思はれて、いとおかき。所謂開拓地、南種子村、字上中村は、是より十五里の奥にて、酒もなく、米もなく、麥もなく、蚤ばかりの所といふに、かねての勇氣も、何となく心細く、今夜限りと思へば、例のを買ふ、一炊の粟飯ならぬが邯鄲の人よりもうれしき。

この西之表といふは、戸數五百許り、人口三千五百に餘り、この嶋の主邑にして。昔はかの種子嶋家の城下なりしなり。電信郵便局、郡役所(馬毛島を合せて熊毛郡といふ)警察署などあり。この夜、郡長牧野氏を訪ひ、熊毛歌集、老嫗物語、及地理纂考を借る、携え行きて、蚤の痒さを忘れんが爲なり。六日。荷物は、馬に負はせて出づ、磯邊傳ひなり。半里ばかり、竹崎といふにかゝりける時、雨來りて、右手に見えたる屋久の嶋も、今は波の音に隠れて、風も又荒る、歌など考へて、この味なさを忘れんとす。

降らは降れ吹かは吹け雨風よつきはなはかり我うたならめ。

荷鞍にははせを葉かさして小笠とれゆふたちすなり竹崎の浦。

降ると見て小笠を取れば降りもせてにくきは誰のこゝろなるらん、

壹里ばかりにて、全く止み、晝食は磯山の店にてすまし、阿高の磯といふを過ぎ、嶋間を経て山道に入らんとす、上中村は、また七里ばかりなり、時に午後三時。

坂井といふ村は、行松の間にあり、四五軒ばかりにて、茶店あり、こゝに來ると、檜林は、切りに生睡なまつすを呑み、世にもあられぬ顔をして、餓えて動けずといふに、見れば、棚に焼酎壺のあるなりけり、是を見て、おのれも即入る。花あれば、といふ昔の人の心にも、似通ひたりや、と獨りゆかしがりて、おのれがはなる、おのれながらにくし。

豚のウウイイと啼くに、軒端を差しのぞけば、日は全く暮れたり。さらばとて立ち出づ、酔ひ心なれば、松明も買はず、檜林は始めの檜林にあらず、眞先に立ちて、ひた急ぎに急ぐ、最早二里ばかりは、と思ふに、まだ犬の聲もなく、たゞ荒野風長くして、星河微に、より／＼水聲の南に走れるを聞くのみ、覺束なけれど、聲を傳うて林中に入るに、一村落を得たり、上中村は即是れ。

檜林が開拓地の支配人は、牟田四誓といへる人にて、元は肥前平戸の一禪寺の住職なりしが、偶儻不羈にして、常尺を喜ばず、終に寺を捨て、此南島に來り、移住民のね頭となれるなり。さなきだに、世を隔てたるに、かやうの人のあるとなれば、戸障子などのたゞまひは言はずもがな、坐に入れば、奇臭蒸すが如く、芥の如き疊は、艾もぐさの如くちぎれたる中に、蚊を叩いて火爐の邊に、例の焼酎を煮て、鶏を焼く、恬然たる其風、恰も岩穴の人に似たり、彼、佛因を去りたれど、佛因未だ彼を捨てざるなきか。

七日。けふは、北一里ばかりの焼野といふ所を測量す、おのれは、固よりかやうのことには、無縁法界なれば、せんすべもなく、さりとて獨り残るも心ぐるしく、メイトルメイトルを取りて間けんを打ち、木を切りて番

號を記し油汗を流して日も暮れ、に飯り、行水をと思へど、井戸なければ、川溝に行く。飲料もこより酌むなり。

八日。午前の間は、頭痛すれば休み、午後より又測量の助け手となる。今夜は、此島特有の黒鳩といふを鍋焼きにす、野菜といふもなく醬油といふもなければ、黒砂糖は手製のことなれば、惜氣もなく、味噌煮にして、圍爐裡をめぐりて、献酬又例の如し、今はかの唐芋焼酎の臭味も忘れて、是を命とも思ふなり。さはいへ、かやうの奥に来て、毎晩酔を得、米を食ひ、肉を食うて、(悉く豫想の外にて)三人面白う、おかしく遊び暮らす、いかにあるじの心盡して、好遇するかを思へ、固より家内としては、椽の向ひに居る鹿毛の馬(八嶋と名け、常はたゞ八よくと呼ぶ)と、所生れの次郎といふ下男とのみなれば、衣を濯ぎ、膳を洗ひ、乃至蚕を追ひ蠅を殺し、凡て萬端手の届かぬも當然の事なり。こは、あるじの幸田坊自らも言ひたるなり。

かくするうち、近邊の人も寄り來、素麵と白砂糖とは、このあたりの太字の食と聞けば、振舞ふに、顔の崩るゝまで喜ぶ、中に近郷の親分あり、年七十ばかり、足齋えたれど、話ハ頗健かなり。聞くに、こゝの習ひとして、若きものは、親あるもなきも、皆一人の親分を持ち、年に三度、必正月二日、五月五日、九月九日に、米一升と焼酎二杯(杯とは樽又は升の意か)とを齋し來りて、其懇命に對へ、又其婚禮喪祭などの事あれば、皆寄りて、其一家一切の事を手傳ふ。この人などは、二十人餘りも子分ありといふ。思ふに、此風俗は、かの鹿兒嶋に於ける郷中制度に由來するものならんか。

九日。けふは、この嶋の極南、砂坂村に行く、例の測量なり。三四十戸の江村にして、其二十余戸は、檜林が小作人なり。今夜はこゝに宿る。村人いたく喜び、年寄頭は、全村の老若を集めて、杯盤の間

に呼び、三味をひき、淨溜璃を語り、地歌のシヨング節は、尤其得意とするところ。おもふに、村内打ての藝ものなるべし、年は六十五才なり、三味も此人ばかりがひくなり。

とても名所な岬の蘇鉄、花にや咲かれど、菜が名所。ハア、シヨング、シヨング。
さてもうきつな、開聞岳よ、雲の帯してて、ニヨコ〜と。ハア、シヨング〜。

其調子は、かの琉球節を壹段緩かにしたるが如し。このあたりの唐芋焼酎は、唐芋の腐れかゝれるもののみを絞られたれば、少しく酸味を帯び、始めのはどは、舌に沁み、腸を刺して、酔少しくも廻はらざりしが、月漸く深けて、シヨング節益々盛に、若き女などは、小笠を被りて、手踊りを始むるに及び、耳熱し、酔來り、糸山は遂に起つて舞ふ。おのれは例のを得たり。

さえわたる月の出潮のはて見えて心千里の大和田のはら。

巖頭に立ちて、遙に南洋を瞰、酔を吹かせて葵の花陰に眠れる、當時の快心、忘れんと欲すと雖能はず。

十日。昨日の残りを測量し、日暮れて上中村に歸る。思へば、こゝに來りて、已に一週日ならんとす、しかも毎日宗旨違ひの繩引ツ張り、旗を建て、川澤を右横左横に歩き、一枚の單物を汗にする、蓋々滑稽に過ぎて、我好奇の心も、やう〜醒めなんとす、愈々明日はと定められたれば、例の人々を呼び、雞を割き、素麵を煮、唐芋焼酎、泡盛、など心の丈けを盡して、しかも昨年一月見舞の贈物にして、未だ開口の大赦に遇はざりし香竄葡萄酒は、今夜始て杯盤の間に見ゆることを得、遂には觴飛び杯馳せ、飲倒れ、缸轉げ、シヨング節は、到る處に凱歌を擧ぐ、下男次郎は、數へ歌の唐芋節に最も妙を得たり。十一日。午前六時、糸山と共に出立、檜林は測量の終らざる處あれば尙殘れり。宿酔未だ晴れず、僅

に坂井を過ぎて、饑と渴とを覺えたり、さりとて、けふは増田村深川開墾所までなり、五里ばかりの道、何條の事か、と腕まくりはすれど、日は刺すが如く、腹に膨らみなければ、苦悶骨に徹りて、屢昏倒せんとす。糸山僅に一軒の農家を見出したれど、畝に出で、一人も居らず、七十ばかりの山番に、唐芋にても言ひたれど、勝手知らずと言ひて與へず、さらば生にても、と云ひたるに、是も知らずといふ、そこの土まめりになれるは、何か、と小腹を立て、畚の中を指したれど、只へらくと笑ひて、牛のものなりといふ、此場に馬も牛もあるものかと、糸山と共に芽芋を食ふ、渴是がために癒え、饑これが爲に癒え、終に増田村に至る。

この開拓所の支配人は、長谷川新九郎といへる人にて、嘗て獨逸語の教授を受けたることあり、特に糸山は、同縣人なれば、此人を尋ね、西之表まで十五里の道を半分にして、こゝに宿らんとするなり。田野廣漠、殆んど嶋の南北を横れり、馬三十七頭、牛四十頭ありて、毎日鐘を叩いて、壯丁を集め、木を斫り、野を燒き、今は唐芋の植付けをなすといふ。惜いかな、この日、所用ありて氏は西之表に出でて在らず。晝食を濟まして立ち出づ。是より十里の間、山間の徑路にして一軒の家なく、一滴の水なく、夜に入りて、やうく竹崎の海邊に出で、家を尋ねて水を飲み、遂に西之表に入る。今夜波高くして、月出づ、十里の平沙、光りに霞んで、夢の如く淡く、屋久嶋はては硫黄が嶋は、わばるぐとして幻の如し疲れ果てたる足を踏んで、燈火微かなるところを辿れば、白波時に衣を囓んで月婆娑たり。ああ吾今夜にして始めて、孤嶋の潮聲を聞き得たり。歌は捨りたれど、終に出でず。

十二日。けふ舟寄らず、明日なりといふ。上中に一週日は在りたれど、讀み果てざりし熊毛集を終れり、これは、この嶋の歌人の集にして、中には朗々誦すべきものあり。古來武邊の事は、左程ならぬ

ど、和歌を詠むものは、今この西之表にても、尙百人は越ゆべしとぞ。この歌集の中、我心を得たるものは、

夫におくれたるとき、

あさ子

一筋にきりつる髪の乱れしと思ふ心を哀さも見よ

舊君御婚姻の實に寄鶴祝さいふな

宗武

さつまの沖の小嶋に鳴く鶴も君か千年の外なかりけり

海邊立春

長名

さつまの八重の汐路の波風も音せぬ御代の春は來にけり

春月

維善

佐保姫のかすみの袖やつ、むらんおほろになりぬ春の夜の月

旅中高臺

時成

旅衣月にあはれを重ぬるは山時鳥さく夜なりけり

などなり。かの小説家西村天四氏も、この出身なりとぞ。

誰も知れることにて、この嶋は、名に負ふ『種子嶋』を傳へたる處にきて、當時の鉄匠八板金兵衛が後も、今尙在りといふ。

おのれ、こゝに來て尤も驚きしは、言語、体度の上方地方に似たる事是なり。鹿兒島だに異國の思ひあるに、まきてこゝなれば、如何ばかりか不便ならんと思ひ居たるに、只まゝ中古の詞を交へて、おじやる、申す、などいへど、其句調凡て平淡にして、体度も亦かの頑強なるに似ず。思ふに、是大に原由するものあるなり。何ぞや。曰く歴史上の因縁是なり。

種子嶋家の先は、かの平相國が子、行盛の遺孤、菊王丸にして、後に肥後守信基といへる人なり、僅に

北條時政に子養せられて人となりたれど、遂に源氏を憚りて、流竄的封侯を得て、この南嶋に来れるもの。而して嶋津家の先忠久といへるは、即源大頭公の子、氷炭容れざる源平の落胤が、九州の南陲に來りて、隣保の關係をなしたる、頗奇觀といふへま。しかるに種子嶋家は、三代にして遂に島津の附庸となるに至れり、是固より成敗の數然るべきところ、京洛の月にあぐかれし花々公子の一黨は、到底東國武強の人を凌ぐべからざるなり。然り、此の如くして爾來五百年、嶋津の治下に居りて幸に義、秦を王とせざるの徒出でず、所領平穩、月が峰の月は、長に『タカボウ』の樹頭に去來して、『薩摩渾沖の小島に鳴く田鶴も君が千年の外なかりけり』。種子嶋の風尚、尙當時の面影を残して今日に至る、蓋し怪まむに足らざるなり。

十三日。午前十時出帆。開闢岳を天の一方に望まんとしたる時、雲、雨を抱いて重く、風もやう／＼起り、波もまた高く、飛沫舷を越えて夢結びがたし、夜に入りて僅に鹿兒嶋港に着く、午後十時。

さて上陸したり、今夜を孰れの處にか過さん、友人を訪はんか、夜深けて騒動をかけんも本意なし、さりとて、海岸通りに行いて、以前檜林と共に宿りたる處を尋ねんも、本是上等旅宿にして、囊底に劍呑あれば、恰好のところを撰ぶに若かずと思ひ、こゝをば通り抜けて横丁に入る。此時糸山は知巳の宿ありとて、別れたれば、獨り旅燈を尋ねて縦横にめぐる、されど、よまあしのところばかりにて、心當りのものなし。大道りに出づれば、人の往來繁くして只事ならねば、何事ならんと、おのれも北をさして行くに、八坂神社のお祭りなり、故郷も今頃なれば、社前にぬかつきて、旅中の恙なきを祈る、この時、東本願寺別院の鐘、數ふれば十一時なり。

うろ／＼して、撰みだてなとすべきにあらねば、當り次第に戸を開けて、止宿を談ずれど、風態をヒ

ろくど眺めて、何分客間が塞がつたれば、ど、どの宿屋も、同じ挨拶に悉く宿拂ひとなりて、數ふれば、十何軒を尋ねたるなり。ひべなり、『天然麗質』由來黒みわたりたるが上に、十日といふ日數を、南嶋の汐風に曝したれば、假令荷物は日傘一本なりといへど、短袴校帽は着けたるものを、否是が反て逆待の主因となり、宿屋のみかは『道傍觀者』皆目を敬そだててたることは。嗚呼今宵一夜を喪家の犬となりて、路頭に啼き聞かざるべからざるか、さりとては餘りの愚さ、友人にも語られぬ名折なり、よしんば泊りて金縛りの苦限は受くとも、海岸通りに立ち還らば、先夜の好みに一泊を許さることもあらじ、若玄成らずんば又た他に思ひもあらんすと、遂に尋ねて、番頭に遇ひたれど、訝しげなる返答なれば、直にしかぐの者にて、かくくの次第なりと、打明けたるに、そは嘸かしの事なるべし、されど、客間は悉く入來あれば、しるべの内に心あたりあればとて、おのれをば殘して、出で行きたるが、しばしにて飯り來り、何分深更にて、相宿の人あるが忍ばせらるれば、といふ、勿論、なでう、かごとをいふべき、露をたに凌げばよし、と、番頭につきて、そこに至る。十八九ばかりの若き男、敷帳の中に寝ねたり、聞けば、出水の人にて、巡查の試験を受くるなりといふ。

腹には朝飯ばかりにて、晝と晩とは、船に揺られて食はざれば、床に入りたれど、腹の皮力なくして、夢も結ばれず、苦しさ堪えがたければ、宿のものにひいたるに、飯は最早なし、蕎麥にても尋ねて見んとて、出で行きたるが、なかくに歸らず、一時の鐘を聞きて、やうやう二碗を得、僅に喪家の犬は免れたれど、夏の蕎麥は犬もと聞くに、けふの命をたゞ是にて繋ぐ。されど賈人由來利を知るのみ、洩憤すべきにあらず。今は昔、頼子も、川内の逆旅に、『不顧孤燈守寒燈』と、重陽の祝ひに、一孤客を行燈挨拶にまで顧みず、鹿兒島に入りても『蹶躓自憐一書生、食時爭席出爭履、萬里誰迫爲氏行、逆境未可

説不平、開啓行篋抽書讀、堆薪撐檐尺五明」と、憐むべきは、おのればかりにもあらざりけりな阿々。十四日。朝日のさし入るに、眼を醒せば、隣りの客間には、龍躰丸の振り薬三人ばかり寝ねたり。朝飯もすまして立ち出で、やうくにして、山之口馬場町に至り、兒玉氏を訪ひ氏の友人本田時彦氏と共に打ち連れて浄光明寺、岩崎谷、多賀美山、さては官幣社に祭られたる齋彬公の御社など、隈なく案内せられ、磯の茶屋に出で、晝食し、名物のジャンコ串を食ふ、春餅を焼き、飴と砂糖とをつけたるなり。こゝは大隅に通ふ街道にて、磯の御屋敷なる嶋津邸は、この磯邊の並びなり、後は城山つゞきの蕃山を負んで、見かけは至て質素なり。

浄光明寺といふは、かの十年戦死者の墓地にして、西郷翁を始め篠原、桐野、村田の諸豪傑のあるところ、立派なる拜殿などありて、茶屋など賑はえ。又こゝに我増田宋太郎氏の墓もあり、二尺四方ばかりの石垣を築いて、自然石の碑なり、表に、増田宋太郎大人、として、其兩側に、

誠もて建てたる此の堅石にうちぬその名を殘せよや君

藤原久政とありて、裏に、十一年九月念九日、於城下戦死、終年二十四才、建築協力、同縣豊後國西國東、平民、東藤吉とあり。血萱しこりにまこりて、掃ふに人もなし、我豊の先輩、我豊の先覺者、しかく恨を呑んで、殊方の天に眠る、慷慨の涙留めんと欲すといへども、豈に得べけんや。飯途、甲突川を渡りて、本田氏の宅に至る。西郷、大久保の兩翁は、この川の邊に生れたるなり、其舊宅には誕生地と書きたる太き石碑を建てたり、四五畝ばかりの處なり。本田氏に至れば、渡邊盛樹といふ人あり、薩南加世田の人なり。例の燒耐に、月の更くるまで、四人環坐して、酒腸を試む。

渡邊氏歌うて曰く、

万代にかはらぬ月の下かけにたゞ一筋のまことあかしつ。

本田氏もまた、

わひ見しは今日うなれど竹馬の親しき友のこゝちこそすれ。
れのれも、其志のうれしさに、

村肝のこゝろも晴れて隼人のさつまの沖の月を見るかな。

月やうく深けて、燈微かになれば、四人枕を並べて眠る。所謂薩摩嵐のそよぐと、前庭の松に通へば、夢もまた涼しからず去てやは。

十五日。兒玉、本田と共に、少年中村氏を伴ひて、櫻島に渡り、有村の温泉に遊ぶ。波に望みて近く大隅の高隈山を仰ぐ、かの熊襲の巢窟のありたるどころといふ。この嶋、蚊帳をつざれば、夜ふくるまで、語りあかす。

さつまなた吹きさくる風を枕にて月に心のありむらの里。

十六日。

山へには月も出てけりなまゝは酒を君どのはなしにもかな。

わさも子か今夜のゆめやいかならん汐けにきゆるあまのともしひ。

十七日。けふ歸魔と定められた、『ヨクヒ日』といひて、かの安政二年九月十六日、櫻嶋大噴火の紀念日なれば、ドンタクにて舟を出さず、『西郷どんの縁日』と聞けど、詮なく、入湯と游泳とに、きのふの如く悠々として暮らす。

十八日。歸りて、本田氏に伴はれて、伊知地季通翁を訪ふ、翁は舊鹿兒嶋藩の舊記に精通したる人な

ればかねて志したる、藩時代武士の風教につきて聽かんと欲えたるものあればなり。今年八十二の老人なれども、矍鑠として議論も亦健かに、時事に至れば慷慨膝を進めて談ず。

思ふに、鹿兒島藩二十七代を通じて見るに他藩と違ひ比較的賢明の人は、藩主にありて、臣下に少し、殊に十五代貴久の生父、加世田の相模守忠良、世に日新公といへる人の如きは、實に藩摩武士陶冶の人にして、最心を風教に致し、いろはの數へ歌、及『身のはどを知れ』といふを冠らせて作りたる歌など、今に至るまで尙其歌を唱ふ。されど徳川の中葉以後、太平打ち續きて、四海偃武の頃となりては、淫靡の風漸く長して、かの後兵兒謠を見よ、『怪來健兒語言好、一操南音官長嘯』是れ實に今を去る甚遠からざる文政の交にあり、衣至胛、袖至腕の健兒は、此の如く軟化して『以馬換妾醜生肉』たるなり而して明治維新の頃に至りては、己に『滿襟不乾憂國淚、群言何破丈夫腸』といへるに至る。郷中制度の切、豈偉ならずとせんや。薩摩武士の風教は只郷中制度に由りて維持せられたるなり。これにつきて聊々取調べたれど冗長を慮りて省けり。折りを得て高批を願はん欲す。 南州是に依りて養はれ、甲東是に依りて養はれたるなり。而て今は僅に其名殘を鹿嶋市中に留めたるのこ。

思ふに、教育の制度は、大に其國土の歴史風俗に鑒みざるべからざるなり、鹿嶋の地、氣候暖にして草木肥え、人民生活の度亦緩かなり、稽古徵令、深く恐れて惶るゝところなくば、嘗て祖先が優勝にして劣敗せしめたる、種子嶋の平穩にして民心委靡したるの劇を再演せざらんとすと雖も、豈に得べけんや。若し夫れ或は、祖先の遺風を自らあざけりて偏狹といひ、或は只尊傲自ら高うし『家嫡にても無役の内、他國修行』道同しく義協ふを以て暗に集合す』の心を體せずんば、維新中興の聲價は、月日と共に消却し去りて、後兵兒の謠を歌ふ必しも藝の人頼山陽を待たざるべし。

十九日。拂曉兒玉氏と共に、齊彬公の廟に詣で、海岸に出で、南林寺の松林に、月照上人の墓に詣

づ、いと哀れげなり、清溪院鏡水清月比丘、安政五戊午年十一月十六日滅、とあり福昌寺といふ寺の
なり。波止場に出で、兒玉氏に別れ、小蒸汽に乗る。舟、かの月照入水の兎が崎を過ぎて、近く大陽
の加治木を望まんとする時、夕立追ひ來りて、見るが内に、山を越え、川を渡り、長汀一帶の藝村は、か
つづくに白絹をかけたらんが如く、筆にも口にも及びがたき。正午に大隅の福山上陸。雨はやみ
たれど、霧未だ晴れず、有名なる天王寺山も見えず。舟中、日向高城の人、田中國隆といふ人あり、鹿
兒嶋尋中の人なり、共に嘯吟の味を越ゆ、是隅日の境にして、山嶮くして苔滑かなり。デモ歌二つを
得たり。

沖津風吹きさくとみれば大峯の松よりおつる露時雨かな。

大霧に立ちふたかるゝ天地をふきはらへ嘯吟のやま風。

通山といふところを過ぐる頃、雨又來る。夜に入りて日向都城に入りたれど、川崎氏は、一萬城にあ
りて聞けば、一里ばかりを行く。物悉く眠りて、天墨の如く、徑路縦横に走りて東西なま、折柄、高ら
かに歌ふ聲す、雨にまぎるれど、こなたに來るけはひなり、しばし待ちて、かくくの人はありや、と
尋ねたるに、そは旦那のお内なりとて、案内す、もう歌はやめて、此頃の雨の嬉しさに、おのれにも禮
言はんばかりに、いく度となく喜ぶ、やうくにして、天の一方に燈火を認めたり、旦那の御内なりと
いふ。川崎はいたく驚きて、雨も降りて夜もふけたれば、明日のことならんと思ひしにと言ひて、例
のものを酌む、其情腹中のものより甘し。

二十日。雨降れば、對坐して終日語りくらす。

二十一日。都城に出で、西町講武場に至る。是かの郷中の社の名残りなり。先生は、渡邊甲介といひ

て、温和謹厚の人にて、年は五十四五と覺ゆ。擊劍をなし、夜に入りて歸る。

二十二。又都城に出で、財部氏を訪ひ、共に池袋氏に至る。けふは、かねて講武場の諸氏と共に、石峯なる母智丘神社に詣つべき約あれば、打ち連れて行く。十才の稚兒より二十才ばかりの兵兒二十才に至る、総勢七十人ばかり、飯りは夜に入り、二里の道程を笑ひ興じて、例の話に、疲れも忘れ果て、十時頃歸る。

二十三日。川崎に別れて、都城を出で、講武場に行き、渡邊先生に暇乞ひして、名刺の裏に、身にもしみ骨にもとほる日盛りににはひこほるゝ撫子のはな。

高城までは、五里ばかりなり、田中氏を訪ひ、共に吉田氏を訪ふ、又例のものに他郷を忘れて、夜をふかす。

二十四日。日いと暑し、吉田、田中氏と共に、高城に上る、是むかしの百二の都城の中なりといふ。高城神社あり、老樹風多くして涼し。

二十五日。吉田氏に別れて、宮崎に向ふ。途上一茶店に憩ひたるに、喉乾けども、茶を酌むけはひもなければ、茶を呼びたるに、店女來りて、おのれが傍にありたる茶のまだ残れるが上に、入れさして出またり。かくまでも馬鹿にせらるゝなり、とり上げたれど其まゝに立ち出づ。あとにて如何ばかりか笑ふらん。日のくれぐゝに宮崎に入る、長峰氏を訪ふ。

二十六日。朝、宮崎神社に詣づ、官幣大社なり。皇孫天の健甕龍命の建てられし古社にして神武天皇を祭れり。このあたり古墳いと多く、此御祠も其横側にあるなり。午後、森尾書記官を訪ひて劍道の談を聴く。氏は久留米の人、夙に名をば我中島先生より聞きたるなり。

二十七日。雨降り出で立つ。高鍋を過ぎて都農に宿る。都農神社あり、一の宮といふ、大己貴尊を祭りて、國幣小社なり、都城よりこのあたり細嶋までは、再遊の處なり。

二十八日。延岡を経て豊後路に出でんは、かねての豫定なりしが、日重なりて氣頗る倦みて、歸心矢の如く留むべくもあらざれば、引きかへして細嶋に出づ、是も獨旅の樂なり。故郷に歸るは、また四五日の後と思ひしに、あすの晩は、豊山翠滴の邊、安らかに、幸多く、うれしく、めでたく父母を定省することを得るなり。今夜夢結ばれず、舟を待てる故のみにはあらざるなり。

二十九日。吹き入るゝ嶋風と共に、舟は我白杵灣に入る。蒼々たる鎮南の山、泱々たる白杵の川、是皆我親愛なる友人と共にれのれを待ちたりまなり。

とりいでゝまづ何よりと語るべき薩の夕月多禰の潮風。

稿成りて讀過すれば、不文徒に長くして、貴重紙上を汚したるを恐る。只寛大なる諸兄の海容を祈るのみ。

雨窓の下にて

溪川生附記

鵜戸まうで

日向紀行中の一節

由章子

九日 今日 日は靈境ならびなき、鵜戸神宮を拜み奉らんとするにしあれば、身もさも一きは心して、さて此朝六時ばかりに清武を出たつ。くさくさもてなされし上、何かと心盡しせられし喜をまうして、伊東君と共に家を辭しぬ。君は飢肥へと志したまふなりけり。熊野村と云ふに、木花山(キバナ)といふあり。木花開耶姫無戸室の古跡あるよし、日向纂記に見えたれば、道をめぐりて彼山に登る。上